

100 愛知医専中国人留学生の感謝状

名大の学風といえば、「自由闊達」がよく知られていますが、そのほかにも国際色豊かなことがあげられます。本年5月1日現在、約1,500人の留学生在籍しており、名大生の実に1割近くが留学生です。また、このたび名大は、いわゆる「グローバル30」の拠点に採択され、10年後にはこの数を倍に増やすことを計画しています。

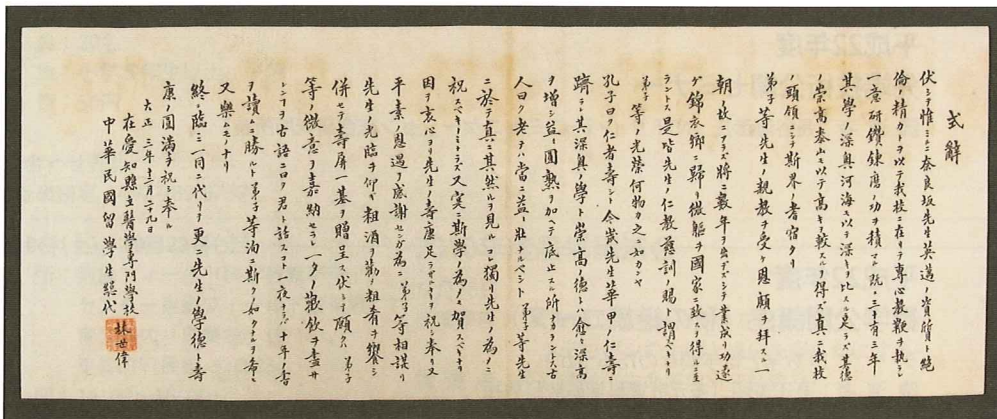
さて、現在の名大留学生の半数は中国人ですが、そのルーツを語る貴重な史料が、名古屋大学博物館に保存されています。医学部の前身にあたる愛知県立医学専門学校（愛知医専）の中国（当時は中華民国）人留学生から、同校教諭の奈良坂源一郎に贈られた感謝状です。

奈良坂源一郎（1854-1934）は、仙台藩士の子として生まれ、東京大学で西洋医学を学んだのち、1881（明治14）年に愛知医学校等教諭として名古屋へ赴任しました。以後40年間、愛知医学校、その後身の愛知医専の教員を務め、とりわけ専門の解剖学を中心とする医学教育に大きな足跡

を残しました。奈良坂は、東大の同期で一緒に赴任した盟友熊谷幸之輔（30年わたり校長を務める）とともに、名大医学部の基礎をきざいた人物といえます。

愛知医専では、1905（明治38）年から留学生が見られるようになります。本格的に増えたのは1909年からで、1913（大正2）年12月の時点で、25人の留学生在籍していました。一見少ないようですが、学生数（看護科・産婆科を除く）が566人の時代です。この25人の留学生は、全てが中国（中華民国）から来ていました。これは、アジアで近代化に成功した日本に学ぼうと、中国から多くの留学生が渡ってきた時代であったことが背景にあります。

1914年12月、留学生たちは花甲（60歳）をむかえた奈良坂のために祝宴をもうけ、そこで式辞として贈呈されたのがこの感謝状です。留学生たちが、いかに奈良坂の学識と人格を慕っていたかよく分かります。



1	3
2	

- 1 中華民国留学生から奈良坂への感謝状（式辞、写真はレプリカ）。2005年、この感謝状を含む膨大な史料群である「奈良坂源一郎関係史料」が、源一郎の孫にあたる奈良坂宏氏から名古屋大学博物館に寄贈された。『名古屋大学博物館報告』第22～24号には、島岡眞氏による目録が掲載されている。
- 2 奈良坂源一郎（2列目中央）と中華民国の留学生たち（「奈良坂源一郎関係史料」）。奈良坂の右下は、感謝状に見える留学生総代の林世偉。また、感謝状とともに、後ろに写っている屏風も贈呈された。この屏風に貼られている書は、「奈良坂源一郎関係史料」に収められている。この祝宴の翌月、日本は中華民国に対し、いわゆる21カ条要求を通告した。奈良坂と留学生たちは、これをどのような思いで聴いたのだろうか。
- 3 大正初期の奈良坂源一郎（『愛知医学専門学校第三十五回卒業生記念写真帖 大正二年度』、名古屋大学大学文書資料室所蔵）